

理学博士 牧野富太郎創始 主幹 薬学博士 朝比奈泰彦

植 物 研 究 雜 誌

第 25 卷 第 1~2 號 (通卷第 264~265 號) 昭和 25 年 2 月發行

Vol. XXV. Nos. 1~2

January~February

THE JOURNAL OF JAPANESE BOTANY

木 村 康 一* : 石南はシャクナゲではない

Kôiti KIMURA : *Photinia serrulata* Lindl. is Shih-nan (石南).

漢名の石南 Shih-nan にわが國では従來シャクナゲ *Rhododendron Degronianum* Carrière (Fam. Ericaceae) をあて、Ericaceae を石南科とさえいつた。松田定久氏ははじめ「石南」はシャクナゲにあらず²⁾と題して石南にシャクナゲをあてるのは否であると論じ、後に「石南」の学名について⁹⁾と題し黄以仁氏の書信に石楠は *Photinia serrulata* Lindl. (オオカナメモチ Fam. Rosaceae) であろうというのが妥当と考える¹⁾と発表しておられる。

私は上海の薬材店で手に入れた石南葉が全くシャクナゲに似ない葉であるので、蘇州上方山で御江久夫氏と採集した(1935 年 4 月)オオカナメモチと比較して、石南葉はオオカナメモチの葉であることを確認し、諸文献に照しても石南にシャクナゲをあてることの誤りであり、オオカナメモチを石南にあてることの正しいことを認めたので、こゝに報告する。

中國文献上の石南

石南は神農本草經³⁾の木部下品に載せられ、葉は「味辛苦、主養腎氣内傷陰衰、利筋骨皮毛」果実は「殺蠱毒、破積聚、逐風痺、一名鬼目」と記す。

松田氏¹⁾は本草綱目⁴⁾等比較的新しい中國の文献をあげ古い文献をあげていない。私は之を補う意味も兼ね主に古い文献について、石南の原植物を判定するのに必要な主な記文を下にあげる。産地は凡そ現在の省別になおして記す。

1. 名医別錄⁵⁾〔産地〕陝西省中東部(山谷)〔採集時期〕葉：2 月~4 月，果実：8 月(旧曆)。

2. 陶隱居⁶⁾〔産地〕安徽省中部(楊子江北岸)〔形状〕葉は枇杷葉のよおである。

3. 唐本注⁷⁾ a 〔産地〕陝西省中部〔形状〕葉は蒟草に似、冬を凌ぎ凋まない。葉の細いものがよい。b 〔産地〕浙江省南部〔形状〕葉が長大で枇杷葉のようで、気味は

* 京都大學醫學部薬學科生薬學教室

用いるに適しない。

4. 図經⁸⁾ a.〔產地〕南北各地、石上に生える。〔形状〕株極めて高大なものがある。
b.〔產地〕楊子江中下流域〔形状〕葉は枇杷葉のよおで小刺があり、冬を凌いで凋まず、春に白い花が集つて咲き、秋に細い紅い実を結ぶ。c.〔產地〕陝西省中南部〔形状〕葉は奉草に似、青黄色で皆紫の点があり、雨が多いとよく生長して 2~3 寸に及び、根は横にのび、細く紫色で、花や実ができず、甚だよく茂る。

5. 衍義⁹⁾〔形状〕石南葉の状は枇杷葉の小さいもののようで、たゞ裏に毛がなく、光つていてしわまない。正二月の間に花を開き、冬の間には 2 枚の葉が花苞となつており、苞が開くと、中に 15 余の花があり、大さは椿(チャンチン)の花のよおで、甚だ小さく、毎 1 苞がおよそ彈ほどの大さで 1 穂となり、1 花は 6 葉で、1 葉に 7, 8 穂があり、淡白緑色で、葉末がかすかに淡赤色で、花が開くと、蕊が花に一杯にひろがり、たゞ蕊が見えて花が見えない。花がわずかに咲きおわると、去年の緑葉はことごとく脱落し、漸く新葉を生じる。〔產地〕京洛(陝西)、河北、河東(山西)、山東には頗る少ない。湖南、湖北、江東(安徽省南部)、江西、浙江には甚だ多い。

6. 紹興本草¹⁰⁾：道州(湖南省南部)の石南図。

中國で今日石楠といわれる植物

現在、中國で石南または石楠と
いつているものは *Rosaceae* の
Photinia serrulata Lindl. で、陳
氏¹¹⁾はこれに「石楠(廣群芳譜)；
千年紅、扇骨木(南京)；石南樹、
筆樹(江蘇高淳)；石眼樹(江蘇無
錫)；鑿角(廣木)；石綱(福建)」
の中國名を記している。

その他中國には同属のものが数
種あり、中國樹木分類学(434頁)
を参照すれば、—

Photinia Davidsoniae Rehd.

et Wils. 檣木(浙江)；刺鑿(湖南)。(湖北、湖南、四川、浙江省等)



第一圖 大森紀念文庫本「紹興本草」の「道州石南」圖の寫し

Photinia glabra Maxim. 光葉石楠；光鑑（湖南）；扇骨木（江蘇），（浙江，湖南省と日本）

Photinia villosa DC. (*P. variabilis* Hemsl.) 毛葉石楠。（廣東以東と日本，朝鮮）

Photinia villosa var. *sinica* Rehd. et Wils. 廬山石楠（江西廬山，湖北房縣，興山縣及四川省）



第二圖 江蘇省蘇州郊外上方山の *Photinia serrulata* (1935, Koiti KIMURA phot.)

日本での誤解

中國の石南が日本にない植物であるため，その原植物については古來いろいろ書かれ，遂にわが國のシャクナゲが石南になつてしまつた。

箋注倭名類聚抄¹⁰⁾ 木) に千金翼方¹²⁾ 證類本草¹³⁾ の下品に石楠に作り，本草和名¹⁴⁾ に石南草に作り，佐久奈无佐と記すと。医心方¹⁵⁾ には石南草，和名止比良乃岐；新撰字鏡¹⁶⁾ には石南草，志麻木，又云止比良乃木；倭名類聚抄¹⁷⁾ には石楠草，楠音南，和名止比良乃木，俗云佐久奈无佐とし，要するにわが古典では，石南と石南草をあわせてトヒラノキまたの名サクナムサとした。

このトヒラノキが今日のトビラまたはトベラ *Pittosporum Tobira* Ait. ((Pittosporaceae) となり，サクナムサはシャクナゲとなり，今では石南がトベラの漢名とするものはないが，シャクナゲの漢名としてあやしまず，シャクナゲにあわせて石南華の

文字も行われるに至った。

今日のトペラとシャクナゲの花の、枝の先に集つて咲く姿はオオカナメモチと同様なので、わが國にないオオカナメモチの石南に上の 2 種、あるいはそのいずれかなぞらえられても怪しむに足りない。和漢三才圖會¹⁸⁾ 84 灌木には今云止比良乃木者非是として、トペラを石南から離してしまつた。本草綱目啓蒙¹⁹⁾ 25 灌木にはシャクナン、シャクナゲ、シャクナンゾウ等と記し、今日用いられているシャクナゲの名を明記している。

む す び

こゝにシャクナゲとトペラの名について論じることがはさしおくことにする。オオカナメモチが石南の記文によくあう植物であり、現在中國でこれを石南という、葉としてもその葉を石南葉としており、シャクナゲやトペラを石南にあてたのは、わが國にオオカナメモチがなかつたために、花のつき方の似たこの 2 植物がまちがえられた。そこで筆者は石南はシャクナゲでもトペラでもなくオオカナメモチであると断定したい。併し、唐本注 a 陝西省の葉の細いものがよく、b 浙江省の葉の長大で枇杷葉のようなものは用いるに適しないとしている。そこでオオカナメモチは産地および葉が大きくてビワ葉に似ている点からいうと後者になり、用いるに適しない方の石南になり、葉の細い上等の石南は一応あずかることにする。

引 用 文 献

- 1) 松田 定久：植物学雑誌 27 (No.323) : 557 (1913)
- 2) " : " 29 (No.339) : 118 (1915)
- 3) 神農本草經 (著者不明) 後漢 (22—250 A.D.) の頃の作
- 4) 李 時 珍：本草綱目 (1595)
- 5) 陶 弘 景：名医別錄 (452—536)
- 6) 陶 弘 景：神農本草經集注 (452—536)
- 7) 蘇敬等唐高宗勅撰：唐本草 (659)
- 8) 蘇頌等宋仁宗勅撰：本草図經 (1062)
- 9) 寇 宗 奭：本草衍義 (1116)
- 10) 王 繼 先：紹興校定經史證類備急本草 (1157)
- 11) 陳 嶸：中國樹木分類学 (1937) 434 頁
- 12) 孫 思 邈：千金翼方 (隋唐間、7 世紀初)
- 13) 唐 愐 微：經史證類備急本草 (1036—1106)
- 14) 深江 輔仁：本草和名 (900頃)
- 15) 丹波介康頼：医心方 (984)
- 16) 昌 住：新撰字鏡：(892)
- 17) 源 順：和名類聚抄 (923—930)
- 18) 寺島 良安：和漢三才圖繪 (1713)
- 19) 小野 蘭山：本草綱目啓蒙 (1813)